

ディーノの長くて綺麗な指がケーキの箱に掛けられて、赤いリボンを摘み、しゅるしゅると解いていく。

それを見ていたら急に緊張と不安がぶり返ってきて、慌てて念押しするが笑って流されてしまった。

そうこうしているうちにリボンが解かれ、箱の上蓋がパカッと開かれる。

(ひいっ！ 遂にこの時が来ちゃったよお!!)
「!?」

箱の中身が二人の前に露になった瞬間、それまでニコニコだったディーノの表情が一転してぼかーんとしたもののへと変わった。

一方ツナは、自分の作ったお菓子にディーノがどんな反応をするか見るのが怖くて反射的に目を閉じてしまい、その表情の変化には気付いていない。

「……………」

頬を微かに赤らめ、唇に手を当て、意外なものでも見たかの如く動揺するディーノ。

だがすぐに、「いやいや、そんなはずはない」と思い直したように軽く首を振る。

そしてフツと自嘲的な笑みを浮かべると、もう一度

改めて視線をテーブルの上にと落とした。

白くて丸いデザートプレート、縁を飾る、チョコプレートで綴られたイタリア語の誕生日のメッセージ。

そしてその中央にクローバーの形になるように並べられた、小さなハート型のガラスの器に入ったティラミスが四つ。

それがツナの作った、ディーノへの誕生日プレゼントだった。

「Buon compleanno, DINO. 04 febbraio……」
(!?)

綺麗な発音のイタリア語が耳に聞こえてきて、ツナは閉じていた目をそーっと開けると、恐る恐るディーノを見上げる。

服を褒めてくれた時と同じ、いや、それよりも心なしか笑みに溢れた顔。

その表情が、つい先程まで動揺に満ちていたなんて知る由もないツナは、どうやら喜んでもらったようだ。とホッと安堵の息を漏らした。

「オレの国の言葉で書いてくれたんだ」